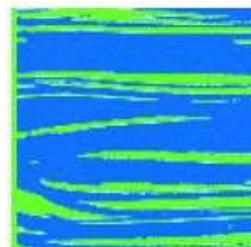


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2017年 秋号 No.88 (2017年10月31日発行)

発行 一般社団法人日本行動分析学会 理事長 坂上貴之
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

日本行動分析学会第35回年次大会を開催して.....鶴巻 正子
日本行動分析学会第36回年次大会のご挨拶.....武藤 崇
大会企画シンポジウムを開催して.....高橋 純一
特別講演 Generating syntactic repertoires: Syntheses of Stimulus Sequences, Equivalence Classes, and Contextual Control. について.....菅佐原 洋
日本の療育・保育・教育におけるABA活用の課題と挑戦.....川野 綾乃
研究倫理に関する最近の動向ー医療領域における研究倫理指針の動向から学ぶー開催記.....島田 茂樹
発達臨床の現場からの報告〜子ども、保護者、スタッフ、教育への支援〜.....小笠原 忍
「医療・産業の安全に資する行動分析学」開催記.....北條 理恵子
【医療・産業の安全管理に資する行動分析学】を開催して.....畔柳 信吾
「刺激等価生と見本合わせ 基礎・臨床・教育の三位一体での展開へ」参加記.....村井 佳比子
はじめての国際学会 : ABAI & SQAB 体験記.....畑 佑美
「日本行動分析学会若手会」の発足ならびに活動内容のご報告.....丹野 貴行
第1回若手研究者口頭発表セッション@コラッセふくしま.....吉岡 昌子
編集後記.....ニューズレター編集部

日本行動分析学会第35回大会を開催して

鶴巻 正子 (福島大学)

2017年10月6日(金)から8日(日)までの3日間、コラッセふくしま(福島県福島市)で、日本行動分析学会第35回大会を開催しました。全国規模の学会開催は初めての経験でしたので迷うことばかりでしたが、企画委員会の吉野俊彦先生、奥田健次先生からの的確なアドバイスを頂戴して準備を進めることができました。心より感謝申し上げます。福島大学人間発達文化学類は教員養成系の学部ですので、6月の附属小学校教育研究公開と教育実習、7月から9月の教員免許状更新講習、認定

講習、特別支援学校の教育実習、集中講義などが重なりまして、第35回年次大会は例年より遅い10月上旬の開催となりました。ご不便をかけたしまいました先生方には心よりお詫び申し上げます。教職大学院の開設(2017年4月)、附属小学校長兼務とともに学卒院生が一人もいないという状況が重なり不安でいっぱいでしたが、特別講演の司会を菅佐原洋先生(常磐大学)が、大会企画シンポジウムの指定討論を杉山尚子先生(星槎大学大学院)が、非会員にもかかわらず実行委員を高橋純一

先生（福島大学）が快く引き受けてくださったのをはじめ、たくさんの方々が温かく手をさしのべて助けてくださいました。準備期間中、前年度開催の佐伯大輔先生（大阪市立大学）より送付いただきました資料にも何度も助けていただきました。重ねて御礼申し上げます。また、行動分析学の魅力を教えていただいた片岡義信先生（福島大学名誉教授）から励ましの手紙をいただき、共に行動分析学を学んだ懐かしい卒業生がたくさん参加してくれたことも大きな励みになりました。

受付を行った10月7日、8日の参加者は実人数で381名でした。10月6日の自主企画シンポジウムは参加者名簿を企画者にお渡ししたため正確な人数を把握しておりませんが、各会場とも50名前後の参加者があったことを確認しております。

おもなプログラムは、学会企画シンポジウム、大会企画シンポジウム、Dr. Harry A. Mackay (Northeastern University and Shriver Center) を招聘した特別講演、公募企画シンポジウム6件、自主企画シンポジウム5件、ポスター発表102件でした。たくさんの方に申し込みをいただきました。三日間、各会場を短時間ですが回ってみました。いずれの会場も熱気あふれる発表と意見交換がされていて活発な学術集会でした。また、帰国したMackay先生からは、参加者の先生方と大変有意義な意見交換ができた、もらった論文は機内ですぐ

に読んだとのメールが届きました。運営者としてたいへんうれしく思いました。

第35回年次大会の開催にあたり、福島大学や地元自治体からの補助を受けたり福島大学附属学校園の協力を得たり、いくつか冒険をしました。その都度、吉野先生、奥田先生は丁寧に相談にのってください、理事会でご検討をいただきました。附属小学校合唱部によるミニコンサート、附属中学校職員による津軽三味線と民謡の親子共演、発表論文集の表紙は日本行動分析学会としてふさわしいかどうか迷いましたが附属特別支援学校の生徒の作品を使用しました。参加者の先生方から面白い企画だった、楽しい学会だったとの感想をいただき私もほっといたしました。

全国規模の学会を開催するという得がたい体験をさせていただき、新たに気づいたことや分かったことがたくさんありました。一日は誰にも平等に24時間です。時間に追われながらの準備でしたので、大学の委員会や地域貢献等の仕事が少ない時期、もっとフットワークが軽快だった頃に経験しておくよかった！と思うことが何度かありました。本大会が、参加者お一人お一人にとって思い出深い年次大会となりましたらこれ以上の喜びはございません。貴重な機会をいただきましたことにあらためて御礼申し上げます。

日本行動分析学会第36回年次大会のご挨拶

第36回年次大会準備委員会・委員長
武藤 崇（同志社大学）

2018年の第36回年次大会は、8月24日（金）～26日（日）の3日間の日程で実施されます。会場は、京都市内の同志社大学 今出川キャンパス良心館（京都市市営地下鉄今出川駅より直通）を予定しております（なお、会場は大学院入試等の都合で、今出川キャンパス内で変更することがございます。その点は予めご了解していただきますようお願いいたします）。また、第36回年次大会は、コンパクトな大会運営を目指しながらも、会員の

皆様の学術的な交流の場として有効に機能するように努力をいたします。何卒、ご理解とご協力のほどお願い申し上げます。

なお、近年、京都市内の宿泊予約が一年を通して難しい状況にあります。会員の皆様におかれましては、できるだけ早期の宿泊先の予約をお勧めいたします。

それでは、晩夏の京都にて、皆様をお待ち申し上げます。

大会企画シンポジウムを開催して

東日本大震災から6年の福島

高橋 純一（福島大学）

2017年10月6日～8日を会期として開催された日本行動分析学会第35回年次大会では、7日の午前に、「東日本大震災から6年の福島」と題した大会企画シンポジウムを開催いたしました。午前の早い時間からの開催にも関わらず、シンポジウム開始時刻からたくさんの方にご参加いただき、誠にありがとうございました。

シンポジウムでは、震災時・震災後に語られることの多い“個々の経験（被災体験や教育支援）”を材料として、行動分析学の観点から“理論”的に考察し、そこに学問的価値を見出そうとしました（もちろん、震災のことを風化させないためのシンポジウムであったことも事実です）。シンポジストとして、大関章久先生（福島大学）、玉木宏樹先生（福島県公立小学校）、川島慶子先生（福島大学）をお招きし、先生方の経験について話題提供をいただきました。原発事故からの全校生徒避難の経験（大関先生）、学部生・大学院生からみた小学校での体験（玉木先生）、被災した児童生徒および保護者へ

の支援の実態（川島先生）について、様々な切り口で実態をお話いただきました。これらの話題に対して、指定討論をお願いした杉山尚子先生（星槎大学大学院）からは、「行動」そのものに着目した玉木先生と川島先生の話題およびシステムの思考として捉えられる大関先生の話題として解釈をいただきました。特に、“当時の「行動」と現在の「環境」との関係を考察する”というご指摘は、経験から理論を学び、結果的に震災経験を風化させないことにつながるものではないかと深く考えさせられました。

東日本大震災から6年が経過した福島で、全国からご参加いただけたみなさまとシンポジウムの場を共有できたことは、大変感慨深いものでした。重ねてお礼申し上げます。そして、「もっと質問の時間があつたら良かったのに」という先生方もいらっしゃるかと思いますが、それは不慣れな司会者（高橋）の責任です。何卒ご容赦いただければ幸いです。

特別講演

Generating syntactic repertoires: Syntheses of Stimulus Sequences,

Equivalence Classes, and Contextual Control.について

菅佐原 洋（常磐大学）

福島で行われた2017年の日本行動分析学会第35回年次大会では、特別講演としてノースイースタン大学およびシュライバーセンターご所属のHarry Mackay先生が講演されました。Mackay先生は、カナダのクイーンズ大学で

Ph.Dを取得され、病院で臨床心理学者として勤務された後、1964年に米国ボストンに移り、Sidmanらと共に、刺激等価性に関する動物研究や発達障がい児・者の支援研究を行われた経歴をお持ちの先生です。その後1972年にボス

トンのノースイスタン大学の教員に就任し、現在は名誉教授となられています。

私は学部生自体から見本合わせ課題、特に構成反応見本合わせ課題を用いた発達障がい児への読み書きの指導に取り組んでいたため、等価性研究をスタートさせた Sidman の論文はもちろん、Dube や McIlvane, Green らの論文と共に、Mackay と Stromer のスペリングなどに関する論文を当時一生懸命読んでいたことが思い出されます。

実はその後、2007 年の ABAI 年次大会で、Mackay 先生が司会、鶴巻先生、私が話題提供でシンポジウムを行う事となり、そこで、Mackay 先生と始めてお会いする機会がありました。それから 10 年、本当に久しぶりにお会いしましたが、その頃と変わらないかくしゃくとしたご様子でした。

さて今回の特別講演では、刺激の順序や系列反応、いわゆるシーケンス反応の獲得とその派生的関係について、お話いただきました。例えば英語では SVO といった語順が重要となる言語です。そのような文法や統語に関わる順序がどのように獲得されるか、また支援すべきか、は言語獲得において重要なテーマです。今回の特別講演では、特に全ての刺激系列を経験しな

くても、中継点（ノード）となる共通の刺激が形成されるシーケンス反応に含まれることで、未訓練のシーケンス反応が示されることについて、発達障がい児・者を対象としたいくつもの緻密な実験とその結果に基づいて話されていました。

1 時間半にわたる講演でしたが、私も含め会場の参加者も非常に興味深く伺い、公演後の質疑応答だけではなく、その後に場所を変えて行われた懇親会会場においても Mackay 先生と熱心に話される学会員の様子が見られ、多くの参加者にとって有意義な特別講演になったのではないかと思います。



公募企画シンポジウム

日本の療育・保育・教育における

ABA 活用の課題と挑戦

川野 綾乃（堺市）

2017 年 10 月 6 日～8 日、日本行動分析学会第 35 回年次大会が福島にておこなわれました。私は「日本の療育・保育・教育における ABA 活用の課題と挑戦」というタイトルで公募シンポジウムを企画し、発達障害児者支援における

ABA の社会実装をテーマに話題提供と指定討論をおこないました。当日は追加席が出るほど盛況で、多くの方に関心を持っていただいたことを嬉しく思います。開催にあたっては、大会委員長の鶴巻正子先生をはじめ準備委員会の皆

様にはたいへんお世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

私がこのシンポジウムでやりたかったことは3つあります。それは「現場のリアル」を学会の場で話題提供すること、「行動分析学会の会員ではない方の意見を討論に交えること」そして「SNSと連動させたシンポジウムの進行」です。



1つ目の「現場のリアル」を学会の場で話題提供すること。これはABAを活用した療育や保育等の実践報告だけではなく、それを可能にするためにどういう事業展開やツール、ノウハウがあるのかという話題も含まれます。話題提供してくださったLITALICO(榎本さん)とADDS(竹内さん)は、発達障害児の療育では非常に注目されている企業および法人で、その事業展開はスピーディかつパワフルです。私は地方自治体で心理職をしています。こういう事業展開を見ていると、官で出来なかったことを民が実現している、官民協働で出来ることは広がる、という思いが強まります。療育・保育・教育の現場にABAをひろめる(必要とする人に確かに届ける)ためには、こういった事業を知り、自分の職域では何ができるのか、どう連携できるのかを考える実践家が増えることが必要だと感じており、そういった願いもあつての企画でした。

榎本さん、竹内さんの話題提供では例えば人材(スタッフ)育成の課題があがりましたが、それに対して、求められるスキルを明示した認定の仕組みや、階級制でSVをおこなう仕組み、

教材や記録シート等アイテムの開発といった方が紹介されました。その他にも、e-learningやwebコンテンツなどを通したサービス提供、研究の実施など、LITALICOとADDSに共通した実践が多くみられました。また「ABAを技法ではなく枠組みととらえる」「共通言語を用いていく」といったLITALICOスタイルや、既存の療育センターや事業所にABA療育を実装拡充していくADDSのプロジェクトの様子など、それぞれ独自の取り組みについても詳しく知ることができました。

一宮児童相談センターの塩田さんの発表では「ABAはむずかしい?」という議題で、保育士研修での調査データをもとにした報告と考察がおこなわれました。研修でABAの知識は獲得できてもストラテジーシートの記入が出来る人はわずかであったり、集団生活上の制約から介入が困難であるなど、学校園で助言指導をおこなったことのある人なら「あるある」とうなずいてしまう報告でした。塩田さんの発表からは、ABAがどんなに優れた理論や技法をもっていても、導入する先の職業文化に馴染み実際に使えるものにするためには、もう一工夫いるということが明らかになりました。解決策としては、こつこつやる、飲み込みの早い人をキーパーソンにして職場内で考えてもらう、環境に応じた機能的な導入をする等の提案がありました。これはADDSの竹内さんが実装プログラムの報告の中で「現場の先生は子どもの小さな行動の変化や子どもの発する小さなシグナルを見る力がある」と話されていたことや、同じ会場の次のシンポジウムの発表にあった「学校の先生は横文字が嫌いだからPBSという言葉は使わない」というエピソードにも繋がってくると思います。支援を導入するという行為そのものがどういう随伴性におかれるのかも、重要な視点だといえます。

さて2つ目は「行動分析学会の会員ではない方の意見を討論に交えること」です。専門家が集まり深い議論を繰り広げられるのが学会のよ

いところであり求められることだと思いますが、臨床の現場にいるとそれを「内輪だけの自己満足」と言われてしまうことがあります。そこで今回は会員外の先生にご意見をいただこうと思い、児童精神科医の吉川徹先生に指定討論をお願いしました。実は吉川先生は、実名は明かされていませんが **twitter** でもご活躍されていて、フォロワー（そのアカウントの投稿を読んでいる人）の数が一万人を超える有名人でもいらっしやいます。指定討論では、発達障害児者の圧倒的有病率に対して支援の供給が追いついていない現状をふまえ、必ずしも適性の高くない候補者でもセラピストとして養成しなければならぬこと、非専門家への技術移転が容易にできなければならないことを述べられました。また、現場のニーズは子どもの行動変容の中でも特にルール支配行動にあり、それを意識した介入が不十分なのではないかという指摘、関わる大人の行動変容のためにはトークセラピーが有効なのではないかという提案、そして ABA が教育虐待や代替医療の入り口になってしまうリスクなどについて、問題提起がなされました。その鋭い指摘や、会員内では知り得なかった衝撃の告白に、会場もたいへんな盛り上がりを見せました。吉川先生は ABA について「基礎理論としての圧倒的な優秀さ」があり「技法としてもパワフル」であるとしたうえで、それゆえの落とし穴が存在することを示してくださいました。そして、スキルの獲得ばかりに注目するのではなく「人生の質を支える」ことに意識を向けていくことにも言及されました。ここからいよいよ討論をというところで時間がきてしまったのが残念でなりません。

3つ目は、「SNS と連動させたシンポジウムの進行」です。今回は **twitter** を利用し、ハッシュタグの機能（「#ABA 療育シンポ」のように#をつけたキーワードを発言内に入れて投稿すると、その発言が検索画面で一覧できる仕組み）を使って、聴いている方の質問や意見をリアルタイムで集めながらシンポジウムを進めました。

こうすることで、全体の進行をみながら適切なタイミングで質問をピックアップすることができます。また話題提供の発表中に頂くご意見をうけて、指定討論前に、議論の前提をフロアと再確認することも可能です。このように聴いている方の関心をリアルタイムに把握できることは、進行の上で非常に有意義と感じました。問題点としては、会場内で **twitter** を利用できる人がおそらく 1 割に満たなかったことです。特に当日は口頭の質疑の時間がとれずに終わってしまったため、フロア全体で議論する場を設けられなかったことは大きな反省点です。これには、**twitter** を利用する旨を当日会場ではなく大会抄録で告知したり、端末をお持ちでない方でも希望すれば利用できるような環境設定を考えてもよいかもしれません。もちろん従来通りに口頭質疑の時間を確保することも必要です。司会の力量はありますが、うまくできれば充実度はかなり高まるであろう手応えを感じました。



実はこの企画自体も **twitter** 上での議論をきっかけに話題提供者が集まったという経緯があり、シンポジウムの後も **twitter** を通して様々な意見が寄せられました。その中のひとつに「ABA は結果を出せているのか。その評価の仕方とは」という話題がありました。それについてのメンバー間の会話で ADDS の竹内さんは「効果の出方が子供によって様々であることは事実ですから、「世間で謳われるほどの効果が出なかった！」と感じられる方も一定数いることは頷けます。効果のあり方をきちんと保護者や

周囲の人と共有して（IQの変化や発語など劇的なものばかりでなく、小さな成長にもスポットを当ててサポートしていく）、小さくてもポジティブな変化を共有できる支援をしていくことが重要」と話されました。

我々は常にクライアントの利益を、生活の質や人生の豊かさをも含めて、追求しなければなりません。それをふまえて標的行動を決定し、

結果を出すことが求められています。知識と技術の習得、ノウハウや一工夫の開発、そして臨床の姿勢について一層の研鑽を積むことが必要だということを、このシンポジウムを通してあらためて思いました。どうぞ諸先生方におかれましては、今後ともご指導のほどよろしく願いいたします。

公募企画シンポジウム

研究倫理に関する最近の動向

—医療領域における研究倫理指針の動向から学ぶ—開催記

島田 茂樹（常磐大学）

2017年10月6日（金曜日）から8日（日曜日）に開催された一般社団法人日本行動分析学会第35回年次大会（コラッセふくしま、福島大学）において、日本行動分析学会倫理委員会は、「研究倫理に関する最近の動向—医療の領域における研究倫理指針の動向から学ぶ—」というテーマでシンポジウムを行った。

最初に島田茂樹（常磐大学）が、企画趣旨を説明した。研究の倫理をめぐる問題に関しては、研究費の不正使用に関わる問題、研究データのねつ造や論文盗用に関する問題、公正な研究の遂行に関わる問題、研究者の研究を遂行する権利に関わる問題等が挙げられる。大学等の研究機関においては、研究倫理教育の徹底が求められており、公的研究費の応募に際して、応募者は、研究倫理教育を受けていることが要件になっているものも多い。

そこで日本行動分析学会倫理委員会は、研究倫理の近年の動向と概要をお伝えすることにしたいと考えた。そこで、研究倫理に関して近年改定が行われた医療領域の情報をお話いただくことにした。これを通して、先行する領域の

動向に学びながら、倫理に関する意識を高め、今後の議論を深めていくきっかけとなることをねらいとした。

続いて倫理委員会委員である鎌倉やよい氏（日本赤十字豊田看護大学）より、「医療領域における研究倫理の動向」というテーマで話題提供をいただいた。最初に、これまでの研究不正防止に関するガイドラインの変遷、倫理指針の変遷が概観された。現在の指針は、2014年施行の「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」が2017年に一部改正されたことによるものである。この改定の背景には、個人情報保護法等の改正を踏まえ、個人情報の定義や取り扱い等の見直しが必要となったためである。

変更の要点の第一として、用語の定義の見直しが説明された。個人情報保護法との改正により新たに定義された用語は、個人識別符号（例えば、ゲノムデータ等）、要配慮個人情報（例えば、病歴を含む個人情報）、匿名加工情報及び非識別加工情報等の用語であり、「連結不可能匿名化」と「連結可能匿名化」の用語は廃止された。その中で、要配慮個人情報とは、本人の人種、信

条、病歴、犯罪の経歴等本人に対する不当な差別、偏見、その他の不利益が生じないようにその取り扱いに特に配慮を要する記述等が含まれる個人情報を行い、その中には、身体障害、知的障害、精神障害（発達障害を含む）を内容とする個人情報を含むとされている。

変更の要点の第二として、インフォームド・コンセント等の手続きの見直しが説明された。研究を行う場合、研究対象者から原則として適切な同意を受けなければならない。研究対象者から適切な同意を受けることが困難な場合には、オプトアウトの手続きにて要配慮個人情報取得または提供することが可能であることも説明された。オプトアウトとは、予め研究目的等を研究対象者等に通知又は公開し、研究が実施又は継続されることについて、研究対象者が拒否できる機会を保障する方法である。

新たに試料・情報を取得して研究を実施しようとする場合のインフォームド・コンセントについて、侵襲を伴う研究の場合は、説明事項を記載した文書により、インフォームド・コンセントを受けなければならない。侵襲を伴わない研究では、必ずしも文書によるインフォームド・コンセントを受けることを要しないが、口頭によるインフォームド・コンセントを受け、その内容の記録を作成しなければならない。いずれの場合もインフォームド・コンセントを受ける必要があり、文書で受けなくても記録は必ず作成しなければならない。

ここで用いられている侵襲とは、医学用語であり、指針では「研究目的で行われる、穿刺、切開、薬物投与、放射線照射、心的外傷に触れる質問等によって、研究対象者の身体又は精神に傷害又は負担が生じることをいう。侵襲のうち、研究対象者の身体及び精神に生じる傷害及び負担が小さいものを「軽微な侵襲」という」と説明されている。

インフォームド・コンセントの説明事項は次の通りである。

①研究の名称及び当該研究の実施について研究

機関の長の許可を受けている旨

②研究機関の名称及び研究責任者の氏名

③研究の目的及び意義

④研究の方法（試料・情報の利用目的を含む。）及び期間

⑤研究対象者として選定された理由

⑥研究対象者に生じる負担並びに予測されるリスク及び利益

⑦研究が実施又は継続されることに同意した場合であっても随時これを撤回できる旨

⑧研究が実施又は継続されることに同意しないこと又は同意を撤回することによって研究対象者等が不利益な取扱いを受けない旨

⑨研究に関する情報公開の方法

⑩研究対象者等の求めに応じて、適切な範囲内で研究計画書及び研究の方法に関する資料を入手又は閲覧できる旨並びにその入手又は閲覧の方法

⑪個人情報等の取扱い

⑫試料・情報の保管及び廃棄の方法

⑬研究機関及び個人の収益等、研究者等の研究に係る利益相反に関する状況

⑭研究対象者等及びその関係者からの相談等への対応

⑮研究対象者等に経済的負担又は謝礼がある場合には、その旨及びその内容

⑯通常の診療を超える医療行為を伴う研究の場合には、他の治療方法等に関する事項

⑰通常の診療を超える医療行為を伴う研究の場合には、研究対象者への研究実施後における医療の提供に関する対応

⑱研究の実施に伴い、研究対象者の健康、子孫に受け継がれ得る遺伝的特徴等に関する重要な知見が得られる可能性がある場合には、研究対象者に係る研究結果の取扱い

⑲侵襲を伴う研究の場合には、当該研究によって生じた健康被害に対する補償の有無及びその内容

⑳研究対象者から取得された試料・情報について、研究対象者等から同意を受ける時点では特

定されない将来の研究のために用いられる可能性又は他の研究機関に提供する可能性がある場合には、その旨と同意を受ける時点において想定される内容

②侵襲（軽微な侵襲を除く。）を伴う研究であって介入を行うもの場合には、研究対象者の秘密が保全されることを前提として、モニタリングに従事する者及び監査に従事する者並びに倫理審査委員会が、必要な範囲内において当該研究対象者に関する試料・情報を閲覧する旨

なお、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」一部改正の趣旨と主な改正内容は次のサイトで閲覧できる。

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/02/1382725.htm

この倫理指針の全文は次のサイトで入手できる。

http://www.lifescience.mext.go.jp/files/pdf/n1443_01.pdf

厚生労働省によるこの倫理指針のガイダンス資料は次のサイトで入手できる。

<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10600000-Daijinkanboukouseikagakuka/0000166072.pdf>

以上、人を対象とする医学系研究に関する倫理指針の一部改訂に伴う変更事項について、要点を絞った説明が行われた。

続いて、私が「研究倫理を学ぶための資源」というテーマで話題提供を行なった。研究倫理が学習できる資源を、e-learning教材を中心に紹介した。

①Green Book 「科学の健全な発展のために－誠実な科学者の心得－」

これは、日本学術振興会「科学の健全な発展のために」編集委員会が編集したもので、丸善出版から900円＋税で販売されている。また、日本学術振興会ホームページの研究公正のページ（<https://www.jsps.go.jp/j-kousei/index.html>）からテキスト版を入手することができる。研究倫理全般を網羅しており、とくに研究の不正防

止に多くのページが割かれている。

②eL CoRE

<https://www.netlearning.co.jp/clients/jsps/top.aspx>

これは、前述の「科学の健全な発展のために－誠実な科学者の心得－」をもとにしたe-Learningコースで、e-Learning Course on Research Ethics [eL CoRE] と呼ばれ、無料で受講することができる。

③CITI Japan <https://edu.citiprogram.jp/>

CITI Japan eラーニングプログラムの教材は、文部科学省「大学間連携共同教育推進事業」CITI Japan プロジェクト（代表校：信州大学、他5大学）およびNPO法人日米医学教育コンソーシアムにより、米国CITI Programの英語版教材を骨格として、日本の法律・指針その他に沿って作成された。平成29年度より一般財団法人公正研究推進協会（APRIN）が引き継ぎ、教材の作成および改訂を行っている。現在、このプログラムの受講は有料である。

④ICR臨床研究入門 <https://www.icrweb.jp/>

ICRとは、Introduction to Clinical Researchの頭文字である。このサイトは、臨床研究を実施する医学研究者、臨床研究専門職、倫理審査委員会の委員や倫理審査委員会事務局、研究の事務的な仕事をする人々を対象に、臨床研究に必要な知識を提供するe-learningサイトである。その他、基礎研究者、疫学者、統計学者、臨床研究のことを勉強したい一般の人々も対象としている。このサイトの受講は無料であるが、修了証の発行は有料になっている。

⑤UMIN e-Learning

<https://moodle2.umin.ac.jp/moodle/>

このサイトは2012～2014年度に、厚生労働科学研究費補助金を受けて構築された。2015年度からは、東京大学大学院医学系研究科臨床疫学システム講座の有志が、ボランティアで運営している。ここでは、臨床研究に関係する6職種（医師・CRC・DM・IRB委員・生物統計家・事務局

事務)を初級・上級に区分した合計12コースかのe-learningサイトの受講は無料である。

話題提供の後、質疑応答が行われた。質疑では、①要配慮個人情報に関して、心理学の研究において個人の行動に関わる特性を聞くことがあるが、これらの情報はどのように考えたらよいか、②倫理教育プログラムを受講する対象として、研究責任者と研究分担者は受けることになるだろうが、研究協力者はどのように考えたらよいか、③個人情報に関わることとして、研究場面の録画はどのように考えられているだろうか、④取得したデータの扱いに関して、以前は研究終了後に適切に処分するようになっていたと思うが、このガイドラインではどうなっているのか、等が話し合われた。

医療系の研究において、研究場面の録画は大変厳しく取り扱われている。心理学や教育の領域では、研究場面の録画はよく行われているし、データ収集のために不可欠の成分となっている

ら、任意のコースを受講することができる。ことも多い。映像情報の取り扱いについては、今後検討が必要だろう。

データの取り扱いについて、以前は廃棄することが基本だったが、現在は一定期間、保存することが義務づけられている。例えば、大学院生が修了した後、学位論文のデータをメディアに保存し、所属機関に提出するようになっている。研究機関はそのデータを研究機関に保存しなければならない。これは、研究の不正防止のため、研究に関して何か問題があった時はいつでも、研究機関が検証可能なようにするためである。

シンポジウム当日は、落ち着いた雰囲気のもとで、質疑応答では議論を深めることができ、今後の課題も見えてくる等、実りある時間を過ごすことができた。話題提供をしていただいた鎌倉先生にお礼申し上げるとともに、参加していただいたみなさまにも感謝したい。

自主企画シンポジウム

発達臨床の現場からの報告

～子ども、保護者、スタッフ、教育への支援～
小笠原 忍 (明星大学)

このたび、日本行動分析学会第35回年次大会が福島にて開催されました。本シンポジウムでは様々な現場で活躍している応用行動分析学を学んだ専門家が、どのような活動をし、どのような課題に直面しているかに関する内容でありました。

本シンポジウムは金子尚弘先生(白梅学園大学)企画の元で、洞口英子先生(福島大学発達障害児早期支援研究所研究員)、竹内康二先生(明星大学)、そして小笠原(明星大学)が現場からの報告を行わせて頂きました。

洞口英子先生からはご自身が携わっておられる研究所「つばさ教室」の概要説明、その成果と課題に関する報告、竹内康二先生からは特別支援学校の外部専門員として活動する中で、応用行動分析学の専門家がどのような役割を担うことができるかに関する報告、私からは児童発達支援事業における課題を心理担当の立場から報告させて頂きました。

先生方からの現場における報告後、質疑応答の時間を設けました。その場では多くのご質問やご意見をいただくことができました。まず、

洞口英子先生には、「つばさ教室」での具体的な活動内容に関することや子どもとの関わり方についてご意見をいただきました。竹内康二先生には、特別支援学校の教員だけでなく、保護者も含めた外部専門員の活動の理解の必要性に関するご意見、外部専門員の一日の具体的な活動についてご質問をいただきました。小笠原には指導員間での指導の一貫性を担保することに加え、機能的な分析の必要性についてもご意見をいただきました。その他、多くのご質問、ご意見

を頂きましたが割愛させていただきます。

これらのことから、行動分析学の理論を様々な現場に落とし込み活用していくことの難しさだけでなく、応用行動分析学の専門家以外の専門職の方々や職員とチームとなって連携することの難しさを感じることができました。今後はこれらのご意見やご助言を参考にしながら、現在直面している課題を解決できるよう努めていきたいと思えます。



金子尚弘先生



左:竹内康二先生 中央:小笠原 右:洞口英子先生

自主企画シンポジウム

「医療・産業の安全に資する行動分析学」 開催記

産業行動分析学研究会代表 北條 理恵子

(独立行政法人労働者健康安全機構労働安全衛生研究所)

日本行動分析学会第35回大会に実に12,3年ぶりに参加いたしました。所属研究所において、長年動物(ラット)と有害化学物質を使用し、行動毒性学領域でオペラントやレスポナント条件づけを実験手法として研究を行ってまいりましたが、当研究所は政府のミッション型であることから基礎的な学術集会への参加はなかなか難しく、ずっと足が遠のいておりました。このたび当研究所の機械安全の専門家である清水尚憲統括研究員との研究プロジェクトにおいて「作業者の安全行動」について研究する機会が与えら

れ、実証実験の結果を自主企画シンポジウムにおいて発表する好機に恵まれました。

実験結果は、やはり行動分析的介入手法の威力を見せつけるもので、今さらながら行動分析学が非常に強力な行動の原理であると実感いたしました。どうしてもこの結果を本丸である日本行動分析学会にて発表したく、今回司会を務めてくださった鎌倉やよい先生と指定討論者である飛田伊都子先生にシンポジウムに参加させていただきたい旨のお願いをしたところ、ご快諾いただきました。本当にありがとうございます。

ました。久々の行動分析学会で、しかも今までになかった領域での発表だったため緊張しましたが、フロアとも活発なやり取りがあり、医療安全との融合も含めて盛況のうちに無事終了することができました。お越しいただいた皆様に感謝申し上げます。シンポジウムには前出の清水統括研究員も参加し、杉山尚子先生とともに機械安全の専門側からの行動分析的介入の必要性や、欧米における機械安全の現在の動向等についての説明がありました。医療安全側からは、ご発表者である畔柳先生が同じくニューズレターに掲載予定と伺っておりますので、本稿では機械安全に関する私の発表を書いていきたいと思えます。

機械安全の領域には、リスク低減を達成するための「保護方策」があり、設計者側と使用者側に分けられます。設計者により講じられる方策は、次の①から③のスリーステップメソッドです。①本質的安全設計方策（機械の設計や運転特性を変更することで危険源の除去または危険源に関連するリスクを低減する方策）、②安全防護及び追加保護方策（機械使用時に危険が伴うあるいは誤使用による危険が予見可能などとき、本質的安全設計方策以外に実施される保護方策）、③使用上の情報（使用者に情報を伝えるための伝達手段）です。今回の発表では、以上のスリーステップをすべて行った上でさらに残ったリスクを低減するための安全管理システムを紹介しました。この支援的保護システム（Supporting protective system、SPS）は、統合生産システム（Integrated manufacturing system、IMS）が作業現場に導入されていることを前提に開発された安全システムです。IMSとは「調和された様式で、別個のパーツあるいは組立品の生産、処理、移動あるいは包装用に、材料搬送システムによってリンクされ、制御機器（すなわちIMS制御機器）によって連携されて一緒に作動する機械の集合体」と定義されています¹⁾。通常、IMS導入現場に存在する作業ロボットや搬送ロボットが稼働中は、作業員の立ち入りが禁止さ

れています。立ち入る際には、いったんすべての機械を停止させてからの入場が鉄則です。ところが多くの現場では、その製造過程で水蒸気や粉じん等が発生することがあるため、ロボットに頻繁な清掃・保全等を行う必要があります。そのたびにすべての機械が停止してしまうと作業が滞ってしまい、作業効率に支障が生じてしまいます。そこで、SPSは製造ラインをいくつかのタスクゾーンに分け、作業員が必要に応じて入ったゾーンのみ機械を停止し、ほかは通常稼働するようにしました。これである程度の生産性は守られることとなります。

SPSには、作業現場における安全を担保するためほかにも重要な仕組みがあります。それは、生産ラインにおいて作業員ごとに作業可能な資格と権限（スキル・技能）が、携帯するタグにより規定されており、このタグをあらかじめ入場口にある操作盤にかざし、資格があり、作業に足る技術を持っている作業員に限りタスクゾーンへの入場が可能になります。もし、入場後に作業員が別のゾーンに行こうとした場合は、ゾーン境界にあるセーフティーカーテンが作動し、通常の非常停止がかかりすべての機械が停止します。また、可能な作業以外は操作盤で選択できないため、入場が許可されません。このような仕組みは、日本人特有の文化と現在の就労事情を色濃く反映してのことです。上司や親しい同僚に「手伝ってほしい」と頼まれると、断り切れずに本来立ち入ってはいけない場所に入ってしまう事故が生じます。また、経験豊富な作業員が経験則から危険を回避していた状況が大きく変化し、未経験あるいは働き始めて間もない作業員が、触ったことのない機械の操作全般を任されたために、ミスしてけがをする事態が生じています。このようなヒューマン・エラーが原因で生じる事故が実は全体の7割にも上ります。日本特有の文化と書きましたが、実はその後、ほかの国でも資格のない作業員の立ち入りがある事がわかりました。

そこで、研究所内にある実際の作業現場を模

した実験場で、10名を被験者としてSPS導入条件と通常の非常停止条件を設け、一つのゾーン内で簡単な作業を行ってもらいました。その際、その作業にかかった時間と入場してから退場するまでの時間を知らせたフィードバック群とフィードバックなし群に被験者を半数ずつ割り当てました。

結果、SPS導入条件は、タグを操作盤にかざす等の動作があるため、1試行にかかる時間は非常停止群より長くなりますが、停止している機械数が少ないため、停止機械数×停止時間はSPS導入群のほうが短く、作業効率が良いという結果になりました。SPS導入により、安全性も担保され、生産性も良好となることが明らかになりました。また、フィードバック群もフィードバックなし群も回数を重ねるごとに作業時間が短縮されましたが、フィードバックがあるほうがより作業時間が短縮されることがわかりました。自分の作業に対する時間がわかるほうがより効率よく作業に慣れていくことが示唆されました。以上が、今回の実験結果です。

話題提供では、ヘルスケアシステムにおける安全を専門とする南デンマーク大学のエリック・ホルナゲル教授の提唱する「Safety-I（うまくいかないことがない）」及び「Safety-II（すべてがうまくいく）」と、機械安全領域で日系BP社が提唱する「Safety0.0（人の注意力に頼る時代）」、「Safety 1.0（安全を組み込んだモノを提供する時代）」、「Safety 2.0（経営層が安全を推進し、IoTを駆使した高次元の協調型安全の時代）」という、二つの異なる安全の考え方が、似通った呼称で用いられている点が飛田先生のご発表の中にありました。「Safety-I」及び「Safety-II」は、機械安全で言うところのそれぞれ「危険検出型」及び「安全確認型」の安全方策であり、SPSはその両者を融合した、いわば「Post Safety-II」あるいは「Safety-III」に当たるのではないかという感想を持ちました。

今回の行動分析学会では、非常に多くの発見と貴重な学びを得ることができました。

共同研究者として今回のプロジェクトに入る前に、清水統括研究員に機械安全の話聞く機会があり、そこで驚いたのが、このような素晴らしい安全システムを開発したにもかかわらず、その有効性を評価する手立てがなかったことでした。そもそも、ハード面の開発に焦点があるため、作業者の使い勝手や有効性を検証するという発想がなかったということです。そこで、作業者の行動を測定し、SPSの使い勝手を評価してはどうか、と提案したら非常に驚かれました。「行動って測れるんですか？」と最初に聞かれたのを覚えています。しかしながら、行動の原理を説明するに至り、機械を作る側にとっては理解しやすかったのか、すんなりと行動分析学は理解されました。当研究所には、ほかの機械安全の専門家も複数おられますが、行動分析学は非常に驚きと感銘を持って受け入れられ始めております。機械安全ばかりではなく、建築や土木の安全にも使えらると清水統括研究員が進言し、これから土木安全のプロジェクトにも参入する予定です。

労働安全の分野に行動分析学が大きな波を起こしてくれるのではないかと期待を込めて、これから実験を重ねてデータを蓄積していく所存です。なお、SPSは日本初の発信としてISO/TRへの提案が認められ、今年12月にキックオフする予定です。

最後に、宣伝です。

このたび「産業行動分析学研究会」を立ち上げました。主に産業分野における労働安全研究領域に行動分析学を取り入れていく試みです。来年の2月24日に東京駅の近くで第1回目の研究発表会を開催の予定です。清水統括研究員のほか、大阪市立大学名誉教授の伊藤正人先生の教育講演、駒澤大学名誉教授の小野浩一先生がコメンテーターとしてご参加下さる予定です。お時間がありましたら、ご参加ください。

（詳細はhttps://sites.google.com/view/sangyo_kodo/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0をご覧ください）

参考文献

1) 木下博文、井上正也、川崎健司、梅崎重夫、平沼栄浩、川池襄、宮崎浩一. 統合生産システ

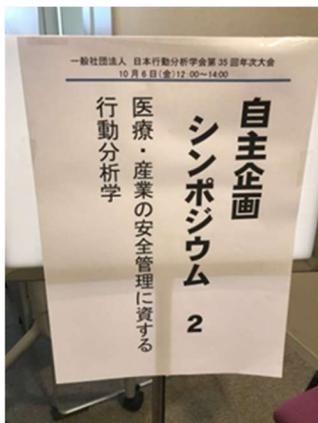
ム (IMS) における安全設計手法の提案—Vモデルに沿った規格要求事項の明確化—. 労働安全衛生研究 3、143-153.

自主企画シンポジウム

【医療・産業の安全管理に資する行動分析学】を開催して

畔柳 信吾 (公立西知多総合病院)

日本行動分析学会 第 35 回年次大会前日の平成 29 年 10 月 6 日に開催された「自主企画シンポジウム 2 医療・産業の安全管理に資する行動分析学」について報告させていただきます。聴講者は学会開催前日にも関わらず 30 名と多くの方が参加され、医療・産業の安全管理においても行動分析学が注目されていることがわかります。話題提供 3 演題 (医療における安全管理 2 演題、産業における安全管理 1 演題) と指定討論が行われ、その中で医療における安全管理について報告させていただきます。



1 演題目は三菱京都病院の山田利恵先生による「集中治療室看護師の薬剤管理における行動分析学的介入の適用」でした。ヒューマン・エラーのリスクを低減させるための指差し呼称は医療現場においても有効です。しかし指導や注意喚起では順守されていない現状があるため、講

義等による教育と行動分析学的介入プログラム (フィードバック、言語的賞賛、自分自身のビデオ視聴) を実施した結果、行動分析学的介入を行うことで指差し呼称を行う頻度は上がりました。逆に講義を聞いただけの場合は、指差し呼称の頻度は低くなる結果が示され非常に興味深い報告がされました。

2 演題目は筆者である公立西知多総合病院の畔柳が「映像によるデブリーフィングを用いた人工呼吸器学習会の有効性」を発表させていただきました。人工呼吸器の操作に不慣れた医療スタッフを対象とした人工呼吸器アラーム対応の学習会の設計と実施を目的としました。学習会の方法として行動形成のための繰り返しのシミュレーション訓練、映像を用いたデブリーフィングを行いました。シミュレーション訓練のみの場合をベースライン期とし、映像を用いたデブリーフィングを追加した介入期と比較しました。自身のシミュレーション訓練を撮影した映像をみてデブリーフィングを行うことで、シミュレーションのみよりも教育効果が上がることがわかりました。

2 演題共に自身の映像視聴を行いながら言語賞賛や振り返りを行うことで行動形成がされやすくなる結果でした。これは社会的強化を用いた介入がいかに重要かを改めて感じた研究でした。

指定討論では滋慶医療科学大学院大学の飛田

伊都子先生による医療と産業における安全管理の現状と安全管理に資する行動分析学を講演されました。安全管理に関する内容としては、安全管理とは元来、危機的状況（許容できない危機）を少なくすることを目的に取り組み、失敗の原因を分析し対策をたてることが行われてきました。いわば「うまくいかなかったことに着目」した方法です。これを **Safety I** と呼んでいます。これは例えば因果関係が 1 対 1 のような単純な場合においては非常に有効な対応方法といえますが昨今の複雑化したシステム、特に人が関わってくるような場合においてはあまり有効ではありません。昨今、この **Safety I** を含



めた考え方 **Safety II** が注目されています。**Safety II** とは 2000 年代に提唱された理論であり、「うまくいくことに着目」し、普段の何気ない業務が何故うまくいっているかをモニタリングし、「うまくいっていることを増やす」ことで安全管理に努める方法を紹介されました。また、事故原因分析の手法として行動分析的な分析方法を用いることで、個人への追及にならない傾向になったとの報告もありました。今後、医療の安全管理に行動分析学を用いることで、患者さんにより安全な医療を提供できることを期待します。



自主企画シンポジウム参加記

刺激等価生と見本合わせ 基礎・臨床・教育の三位一体での展開へ

村井 佳比子（神戸学院大学）

行動分析学を学ぶ者にとって刺激等価性は非常に魅力的な現象です。あらゆる反応が縦横無尽に結びつくメカニズムの説明になると同時に、一般化や機能変容をいかに生じさせるかの手がかりにもなっています。この魅力的なテーマについて菅佐原洋先生が「刺激等価生と見本合わせ 基礎・臨床・教育の三位一体での展開へ」というテーマでシンポジウムを開催してくださいました。金曜の午後、会場には大勢の参加者が集まり、刺激等価性への関心の高さが伺えました。

最初に菅佐原先生から基礎研究と応用研究のつながりをつくる **transnational research** についての説明があり、刺激等価性研究は基礎と応用がうまく繋がった研究の一つであるとお話がありました。しかし実際には刺激等価性に関する基礎研究やそこで用いられる見本合わせ手続きについて臨床との乖離がみられることから、このシンポジウムでは基礎と臨床それぞれの現状や展開を概観した上で、基礎の知見と臨床技術を学ぶためのプラットフォームとしての刺激

等価性研究の可能性について考えるという盛りだくさんな内容となっていました。

話題提供として基礎からは桑原正修先生、応用からは岩本佳世先生がそれぞれのご研究をふまえて刺激等価性研究の現状や今後の展開についてお話くださり、菅佐原先生はセラピストを養成するためのトレーニングとして刺激等価性研究を活用するという切り口でのご研究をご提示くださいました。

指定討論者の真邊一近先生はtransnational researchについて、基礎から応用に発展したSeligman先生の学習性無力症の研究と、応用から基礎、そして応用へと展開していったSidman先生の刺激等価性の研究を例にとり、Seligman先生もSidman先生も自らtransnational researchに関与していたことを指摘したうえで、transnational researchが成功するためには軸足が応用にあって基礎がわかる研究者か、軸足が基礎にあって応用がわかる研究者を育成する必要があるとお話されていました。さらにSidman先生が刺激等価性実験を実際にやってみることが論文を読んだり講義を聞くよりよほど大きな刺激になり、行動分析学への興味がかき立てられると述べていることを紹介され、次の2点について話題提供者に質問されました。

Q1 Transnational researchの研究者の育成についての現状と今後の課題

Q2 どんな実体験が研究者育成に役立つの

か

Transnational researchの研究者育成について、桑原先生は他の分野に比べて行動分析学は比較的基礎と応用の用語が一致しており、交流しやすいこと、応用の研究者が基礎を学んで研究する方が、基礎の研究者が応用で研究をするよりもハードルが低いのではないかとこのことを話しておられました。これを受けて岩本先生ご自身、もっと行動の原理を勉強する必要を感じていると話しておられました。また、実体験については3名の先生方それぞれが実験で得た感動を語っておられました。このお話を聞きながら、私自身、初めてパソコンを使用した実験を行った時、得点上がるたびに実験協力者が敏感に反応するのを目の当たりに見て衝撃を受けたことを思い出しました。頭のどこかで「パソコンのゲームで何がわかるの？」という思い込みがあったことに気づいた瞬間でした。

真邊先生が「研究には驚きと興奮がある」「この実体験が最大の教育である」と話しておられましたが、3名の先生方のご発表はそれぞれのが驚きと興奮の語りであったと感じます。刺激等価性実験を通して基礎と応用に精通した研究者を育てることの可能性を考えるとともに、教育に携わる者が研究の面白さを実感する経験を持っていることの重要性を思い出す機会となりました。ありがとうございました。

はじめての国際学会：ABAI & SQAB 体験記

畑 佑美 (大阪市立大学大学院文学研究科)

2017年5月25日から28日までの4日間、私はアメリカ合衆国コロラド州デンバーで開催された第40回数量的行動分析学会 (Society for the Quantitative Analyses of Behavior; SQAB) と第43回国際行動分析学会 (Association for

Behavior Analysis International; ABAI) に参加しました。この機会は、日本行動分析学会より「日本在住学生会員のABAI/SQABの参加に対する助成」を賜りましたことにより叶いました。この場をお借りして、感謝申し上げます。拙

い文章ですが、私の SQAB・ABAI 体験レポートがこれから参加する皆さんのご参考になれば幸いです。

デンバー空港からデンバーダウンタウンに向う電車の車窓からは何もない広大な景色が延々と広がり、「こんなところで学会が開催されるのか……」と不安を感じていました。しかし、学会会場となったデンバー市街地はコンパクトにまとまった綺麗な街で、食べ物が美味しく、治安が良く（天王寺と比較して）、初めて国際学会に行く私にとって最高の街でした。

25 日からの 2 日間、ABAI に先立って行われる SQAB に参加しました。私はハトを用いて強化子の獲得から次の選択までの遅延時間である強化後遅延が選択に及ぼす影響を研究しています。上記の通り、私は基礎研究に携わっていますので、基礎研究を中心に扱っている SQAB は憧れの学会でした。またニューズレターで先輩方の学会体験記を読み、絶対に行こうと決めていました。本年度の SQAB は Colorado Convention Center で開催され、口頭発表、ポスター発表ともにそれぞれ一部屋で行われました。このようなコンパクトさのお陰か、著名な研究者や海外の院生と直接お話できる機会に多く恵まれました。

私の発表は 2 日目にあり、「Sensitivity to Pre- and Post- Reinforcer Delays in Pigeons」というタイトルでポスター発表を行いました。ポスター発表は 19:00 から 21:30 に行われ、会場ではお酒が販売されており、皆さんお酒が入った状態で来て下さるので、会場はとても和やかな雰囲気でした。10 名前後の方が見に来てくださり、慣れない英語での発表にとても緊張しながらも、精一杯発表しました。私と同じ選択行動を専門にされている方が多く来て下さり、研究について貴重なご指摘をいただきました。ポスター発表も終盤に差し掛かった頃、同期の片山綾さんと一緒に、セルフ・コントロール選択研究の第一人者で、憧れの研究者である Leonard Green 先生にお願いし、と一緒に写真を撮って

貰いました。そのあと幸運にもポスター発表を聞きに来て下さいました。Green 先生はとてもフレンドリーな方で、私の拙い英語に熱心に耳を傾けて下さり、これからの研究に関してアドバイスをしてくれました。このアドバイスは現在行っている研究に取り入れています。ホテルに帰った後、「図々し過ぎたのではないかと反省し中々寝付けませんでした。図々しさのお陰で宝物のような経験が出来ました。

3 日目から ABAI に参加しました。基礎研究に加え応用研究など幅広い研究を扱うようになります。一気に参加人数が増え、企業ブースや本の販売も行われ、一気に華やかになりました。先輩方の体験記にも書かれているように、ABAI は沢山のプログラムが並行しているため、聞きたいプログラムをあらかじめ絞っておき、いつ、どのプログラムに行くか決めることが学会を充実させる鍵となります。その際に役立ったのが、学会アプリの「My schedule」です。「My schedule」はバーチャル形式の手帳になっており、発表が被らないように簡単に調整することができました。スマートフォンお持ちの方は是非使用することをオススメします。私は遅延割引やタイムアウト、遅延割引・確率割引におけるメタ研究などの基礎研究のシンポジウムを中心に周りました。印象的だったのは、質疑応答で会場から発表者に質問を投げかけると、違う人から横槍が入り、また違う人から横槍が入り……という具合にどんどん議論が拡大されていくのに驚きました。質疑応答は白熱した議論が展開されるため、とても早口であり聞き取れなかったことが悔しいです。今後の課題だと考えています。また、次に参加する際には ABAI は臨床の研究が充実しているので、来年は基礎だけでなく、臨床の発表も聞きに行き、見識を広めたいです。

冒頭で少し述べましたが、デンバーは食が充実していました。眞邊先生を始めとする日本の先生方と一緒に戴いたハンバーガーとアメリカのビール、同志社大学の永野茜さんと同

期の片山さんと一緒に食べに行ったタイ料理、ステーキ、お寿司、ラーメンなどなど、「アメリカの料理は不味い」と聞いていたのですが、どれもとても美味しかったです。

ABAIとSQABで過ごした日々は、夢のような時間でした。特に、研究者同士での意見交換は私にとって大変刺激的な経験になりました。最後に、今回日本行動分析学会から助成を受けられたことについてお礼申し上げます。ありがとうございました。



片山綾さん、Leonard Green先生、畑（左から）

「日本行動分析学会若手会」の発足 ならびに活動内容のご報告

日本行動分析学会若手会委員長 丹野 貴行（明星大学）

2017年1月より「日本行動分析学会若手会」が発足しましたので、この場を借りてご報告をさせていただきます（なお理事会への報告はすでに3月に行いました）。若手会は、日本行動分析学会に所属する若手研究者・実践者の研究・教育・就職・交流支援を目的とし、現在8名の有志により構成されています。若手会の活動が、日本における行動分析学のさらなる発展に寄与することを願っております。以下、若手会の活動についてご報告させていただきます。

活動①：日本行動分析学会への要望・意見書の提出

若手の視点から、今後の日本行動分析学会において必要であると考えられる活動等について、要望書・意見書を積極的に提出していきます。これまで、公的なメーリングリストの整備と、学会HPにおける「行動分析学が学べる大学」の発展的更新の2つをお願いさせていただきました。

活動②：年次大会における若手研究者口頭発表セッションの開催

近年の行動分析学会年次大会では、口頭発表の機会が用意されておられません。一方他の学会では、若手向けの口頭発表の枠が用意されている、あるいは賞まで設定されている場合もあります。行動分析学の色が強い研究ほど、そうした他の学会における発表が難しくなり、相対的に競争力を失う結果となってしまっています。そこで、第35回年次大会（於コラッセ福島）において、若手会の自主企画シンポジウムとして、「若手研究者口頭発表セッション」を開催させていただきました（詳細は別記事の「第1回若手研究者口頭発表セッション@コラッセふくしま」ご参照ください）。今後の年次大会でも引き続き開催させていただく予定です。大会に先立ち発表者の募集をメーリングリスト等を用いて行いますので、若手の皆様からの積極的なご応募をお待ちしております。

活動③：『行動分析学春の学校』の開催

2014年度に開催された『行動分析学冬の学校』を踏襲し、2018年3月3日（土）・4日（日）に『行動分析学春の学校』を企画致しました。前回と同様に、行動分析学に関わる大学院生や一般の方を主たる対象にして、トレーニングキャンプ形式で、行動分析について学んでいただくという趣旨となります。実施形式としては、慶應日吉キャンパスの宿泊施設（協生館）に泊りがけの上、懇親会も含めて2日間かけて行動分析に浸っていただきます（なお募集期間は11月1日～11月30日となっています。詳細は日本行動分析学会のHPをご参照下さい）。

若手会の構成：

若手会の構成についてご紹介させていただきます。本会における若手の定義は「40歳未満」としています。また、若手会の活動そのものが負担となり研究や就職を妨げてしまつては本末

転倒ですので、委員は任期無しもしくはそれに近い立場での常勤職に就いている者としています。一方で、次代の若手会への引継ぎも必要となりますので、後期博士課程やポストドクターの方々にも、サポートメンバーという立場でご参加いただいています。現在、若手会は以下の有志により構成されています。

委員（所属）：大月友（早稲田大学）・黒田敏数（愛知文教大学）・丹野貴行（明星大学）・野田航（大阪教育大学）・吉岡昌子（愛知大学）

サポートメンバー（所属）：近藤鮎子（エルチエ（株））・藤巻峻（慶應義塾大学）・松田壮一郎（筑波大学）

委員同士の話し合いや皆様からのご意見に基づき、今後も若手会の活動内容を拡充していく予定です。皆様のご理解とご支援の程、宜しくお願い申し上げます。

第1回若手研究者口頭発表セッション@コラッセふくしま

日本行動分析学会若手会委員 吉岡 昌子（愛知大学）

日本行動分析学会若手会の第1弾企画として第35回大会初日に「若手研究者口頭発表セッション」を開催いたしました。皆様へのプログラムのご案内が間際になるなど不備もございましたが、4時間という長丁場ながら80名以上の方にご参加いただきました。予想を上回る盛況に若手同士の研究交流の機会や、ここ最近はみられなかった大会での口頭発表に対する関心の高まりが感じられました。また当日は最優秀発表者のオンライン投票や会のサポート・メンバーの近藤鮎子さんによるTwitter(#2017行動若手

セッション)での実況中継など新しい試みもありました。初回の発表者6名と題目は下記のとおりです(発表順)。セッションはお一人の枠が30分で発表20分、質疑応答10分という構成です。興味深いアイデアやデータと活発な質疑に刺激を受けられたり、今後の研究が気になると思われた方も多いのではないのでしょうか。発表者の方に参加された感想をお聞きました。松田さんは発表者兼若手会のサポート・メンバーとしても今回の企画を盛り上げてくださいました。

福田実奈(同志社大学)	カフェインレスコーヒーによる反応時間短縮効果とその消去
関根 悟(慶應義塾大学)	鏡を用いた「視覚運動協応」の促進効果: 左右運動反応の「模倣」を通じた検討
金岡あんな(筑波大学)	母語を活用した日本語指導—バイリンガル環境に置かれた ASD 児—

発表の様子 (金岡さん)



発表の様子 (関根さん)

松田壮一郎(筑波大学)	HCI 技術を活用した自閉症スペクトラム障害児における社会的行動の分析
榎本大貴(LITALICO(株) / 東京大学)	短縮版ペアレントトレーニングの効果検証について: 介入有無の群間比較より
中村 敏(大阪市立大学)	ルール支配行動と社会的要因

よく燃えて温かい会場でした、ありがとうございました！来年はあなたも一緒に♪

福田さん

どんどん発表して、聴衆にどんどんシェイピングされましょう。学会の未来を創るのは若手だ！

松田さん

若手研究者が研究を発表する場がとても刺激的で貴重でした！

榎本さん

この企画のおかげで、発表中だけでなく発表後も多くの方と交流ができました。ありがとうございました。

中村さん

若手会では第2弾企画として「春の学校 (<http://www.j-aba.jp/data/2017030304.pdf>)」を2018年3月に行います。また、今年度の改善点をふまえ、来年度の大会(同志社大学)では第

2回の本セッションを行う予定です。若手のみなさま、ぜひ来年度の発表に向けてご用意ください。ご応募お待ちしております！

編集後記

今号は、第35回年次大会関連記事、国際学会体験記、若手会記事など大変多くの記事を掲載することができました。ご寄稿いただいた先生方に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

特に今号は第35回年次大会開催直後の発行ということもあり、数多くのシンポジウム関連記事をご寄稿いただきました。学会終了から今号の締切までの期間が短く、先生方にはご迷惑をおかけいたしまして、申し訳ございませんでした。まだご寄稿いただいていないシンポジウム、学会関連の記事、ならびに現在ご寄稿予定の学会関連記事がござい

たら、J-ABA ニュース編集部までご一報いただけますと幸いです。

また今回、日本行動分析学会若手会発足と第35回大会で行われた若手会の第1弾企画「若手研究者口頭発表セッション」の様子をご報告いただきました。2018年3月には「春の学校」が催されます。ニューズレター編集部では、今後も若手会の活動をお知らせできましたらと思います。

2017年も残すところおよそ2か月となりました。寒い日も続くかと思いますが、お体にお気を付けお過ごしください。(KK)

J-ABA ニュース編集部よりお願い

- ニュースレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。
- ニュースレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。
- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒252-0880 神奈川県藤沢市亀井野 1866
日本大学生物資源科学部心理学研究室
日本行動分析学会ニューズレター編集部
眞邊 一近
E-mail: manabe.kazuchika@nihon-u.ac.jp

日本行動分析学会 春の学校

SPRING SCHOOL FOR YOUNG BEHAVIOR ANALYSTS

2018年3月3日（土）～4日（日）

at 慶應義塾大学 日吉キャンパス

講師： 小野 浩一 （駒澤大学）

大河内 浩人 （大阪教育大学）

丹野 貴行 （明星大学）

澤 幸祐 （専修大学）

松田 幸都枝 （チルドレン・センター）

岡村 章司 （兵庫教育大学）

黒田 敏数 （愛知文教大学）

参加申し込み期間：11月1日 - 30日

対象：日本行動分析学会会員（注1）の大学院生 + 一般（注2）

（注1）定員に満たなかった場合には、学会員以外へ対象が拡大されます（二次募集）。

（注2）11月15日までに申し込んだ大学院生が優先的に参加でき（先着順）、その時点で定員に満たなかった場合、後申し込みが一般の方へ拡大されます。

参加費用：約 10,000 円（参加人数により変動します）

申込先：jabaspring2018@gmail.com（注3）

（注3）件名に「春の学校 2018 参加申込み」、本文に「所属」「氏名」「大学院生、一般の区別」「日本行動分析学会会員である旨の宣言」を記入して上記メールアドレスまで送信してください。

Spring
School
for
Young
Behavior
Analysts

参加のしおり



2018年3月3日(土) ~ 4日(日)

於慶應義塾大学日吉キャンパス協生館

企画：日本行動分析学会若手会

講 義 日 程

第1日 3月3日(土)

10:00 受付開始 ※集合場所（キャンパス案内参照）に直接お越し下さい

10:20 開校のあいさつ・事務連絡

10:30 ～ 12:00

第1限 「行動分析学徒であるということ」

講師：小野浩一（駒澤大学）

12:00 ～ 12:40 昼食 ※日吉周辺の飲食店で各自ご用意下さい。

12:40 ～ 14:10

第2限 「人間行動の実験法」

講師：大河内浩人（大阪教育大学）

（休憩10分）

14:20 ～ 17:50

第3限 「徹底的行動主義を考えるワークショップ」

司会・講師：丹野貴行（明星大学）・澤幸祐（専修大学）

14:20 ～ 15:00 徹底的行動主義の概略（丹野）

15:05 ～ 15:45 方法論的行動主義の概略（澤）

15:45 ～ 16:00 休憩

16:00 ～ 16:30 グループ討論

16:30 ～ 18:00 グループ討論の共有と総合論議

18:10 ～ 18:30 チェックイン ※お荷物を持って協生館までご移動下さい。

18:30 ～ 19:30 夕食 ※日吉周辺の飲食店をご利用ください。

19:30 ～ 交歓会（教室） ここでも催し物を企画しています。

講 義 日 程

第 2 日 3 月 4 日(日)

08 : 45 受付開始

※お荷物とルームキーを持って教室までお越し下さい。客室にお忘れ物のないよう、ご確認よろしくお願いたします。

09 : 00 ~ 10 : 30

第 1 限 「行動分析学と社会問題（仮）」

講師：松田幸都枝（チルドレンセンター）

（休憩 10 分）

10 : 40 ~ 12 : 10

第 2 限 「支援者や保護者へのコンサルテーション（仮）」

講師：岡村章司（兵庫教育大学）

12 : 10 ~ 13 : 30 昼食 ※日吉周辺の飲食店で各自ご用意下さい。

13 : 30 ~ 15 : 00

第 3 限 「実験制御機器の IoT 化」

講師：黒田敏数（愛知文教大学）

（休憩 10 分）

15 : 10 ~ 16 : 10

第 4 限 「海外で行動分析学を学ぶ」

講師：黒田敏数（愛知文教大学）

16 : 10 閉校のあいさつ